あらしの中の十七年

——長屋八内のご一新

かつおきんや・著　田代三善・絵

著者・かつお きんや（勝尾金弥）
1927年，石川県に生まれる。現在愛知県立大学助教授。日本児童文学者協会会員。著書は『かつおきんや作品集』（全16巻），『山から声が降ってくる』『七つばなし百万石』（日本児童文学者協会賞受賞）等。住所／金沢市笠舞1－19－22

画家・田代 三善（たしろ　さんぜん）
1922年，東京に生まれる。日本美術家連盟・児童出版美術家連盟会員。作品は，『東海道鶴見村』『こしおれすずめ』『鶴見十二景』『七つばなし百万石』等の絵本・さし絵多数がある。
住所／東京都世田谷区北烏山3－13－19－203

偕成社の創作文学

あらしの中の十七年
——長屋八内のご一新

NDC 913　　偕成社　348P　21cm　1981年

発行　1981年9月　初版第1刷

著者　かつおきんや
発行者　今村廣

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5
TEL (03) 260－3221(代)　〒162
振替　東京 5－1352番
本文印刷　新興印刷製本株式会社
多色印刷　小宮山印刷株式会社
製本　文勇堂製本工業株式会社

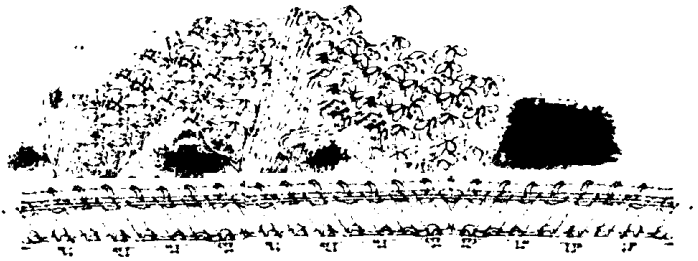
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
ISBN4-03-720370-7

Printed in Japan　© かつおきんや　田代三善　1981

あらしの中の十七年

——長屋八内のご一新

かつおきんや著／田代三善絵

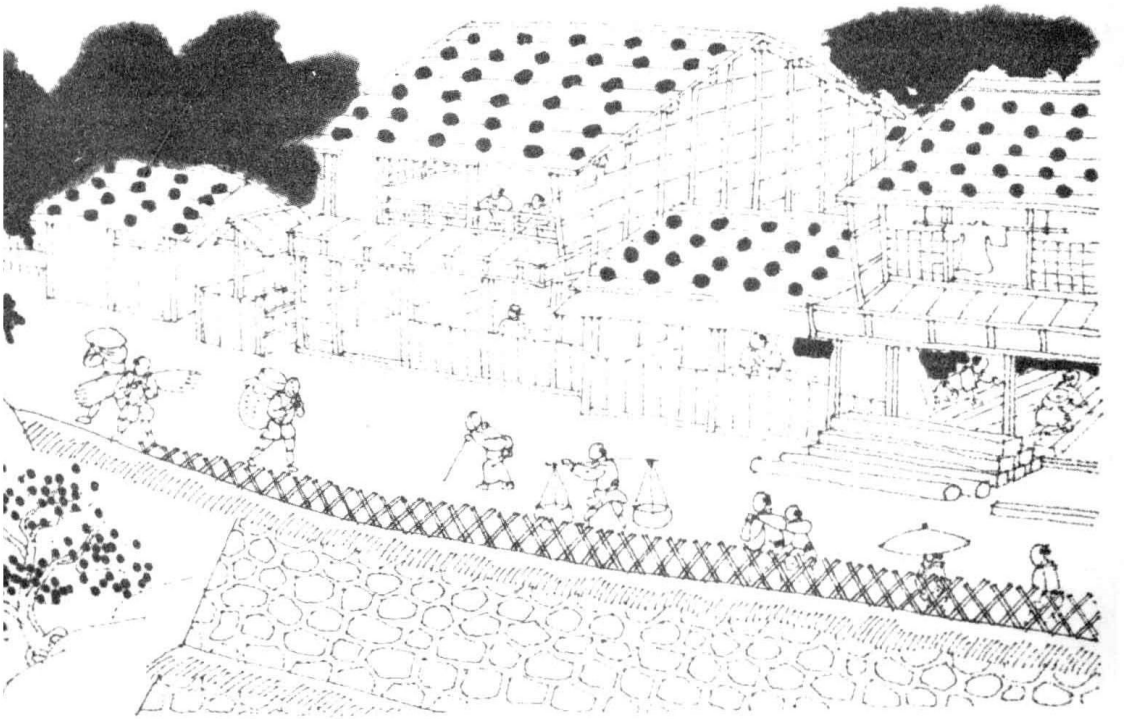


偕成社

あらしの中の十七年／もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章
高岡の打ちこわし〈安政五年夏〉 8
2 ふたりの町奉行〈安政五年夏〉 18
3 八内の高岡〈安政五～六年〉 34
4 一件落着〈安政六～七年〉 53
第二章
1 袖の下〈文久元年〉 72
2 甲冑馬ぞろえ〈文久二年〉 85
3 思いつき〈文久二～三年〉 105
4 銃卒づくり〈文久三年春〉 118
第三章
1 宮腰町奉行〈文久三年夏〉 134
2 寺中屋の火事〈文久三年夏～冬〉 147
3 長州さわぎ〈文久四＝元治元年〉 161
4 千秋順之助〈元治元年〉 173
5 水戸天狗党〈元治元～慶応元年〉 186
第四章
1 京都詰め〈慶応二～三年〉 208



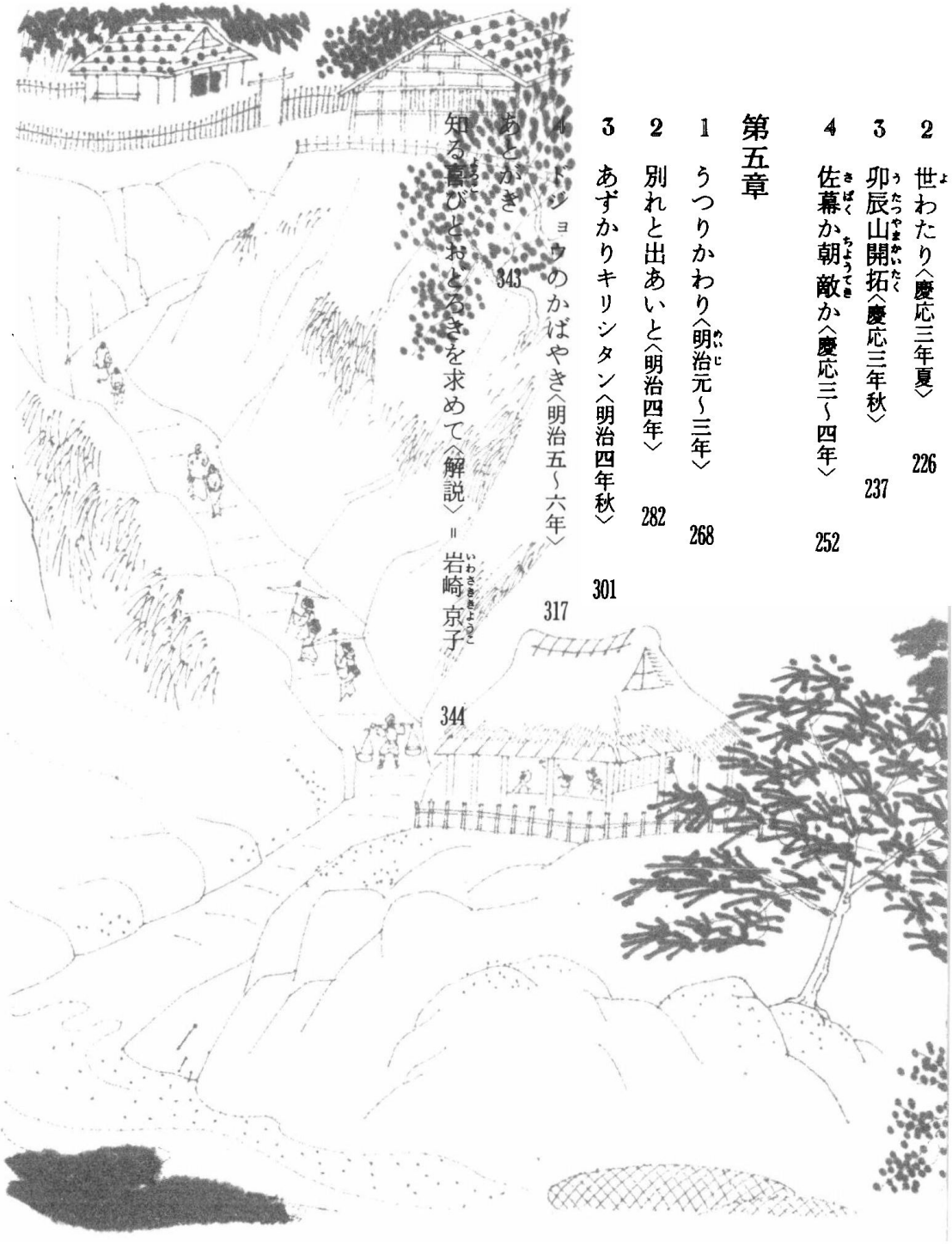
2 世わたり〈慶応三年夏〉 226
3 卯辰山開拓〈慶応三年秋〉 237
4 佐幕か朝敵か〈慶応三～四年〉 252

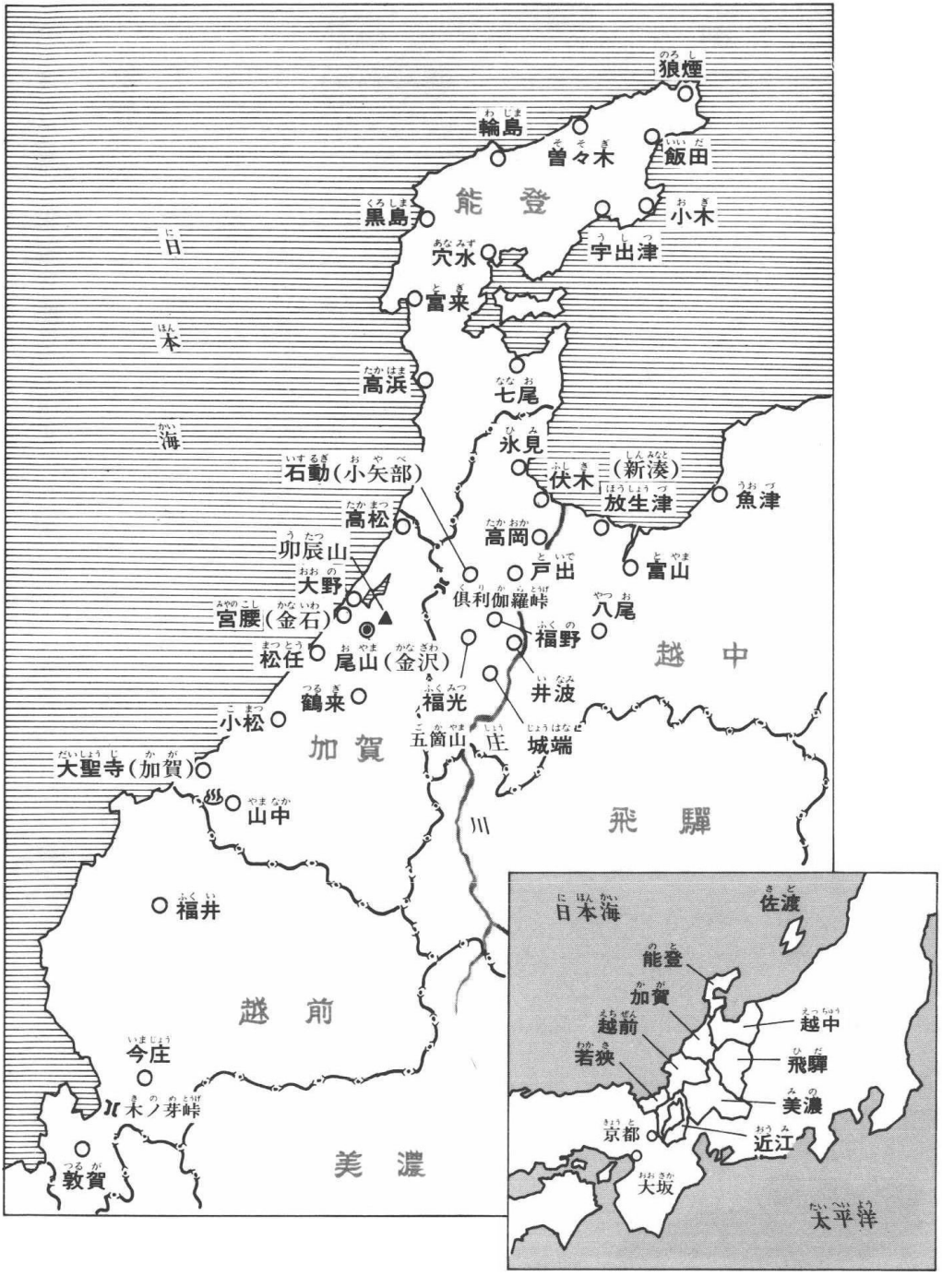
第五章

1 うつりかわり〈明治元～三年〉 268
2 別れと出あいと〈明治四年〉 282
3 あずかりキリシタン〈明治四年秋〉 301
4 ドジョウのかばやき〈明治五～六年〉 317

あとがき 343

知る喜びとおどろきを求めて〈解説〉＝岩崎京子 344




狼煙
輪島
曽々木
飯田
能登
黒島
小木
日
穴水
宇出津
富来
本
高浜
七尾
海
氷見
石動(小矢部)
伏木
(新湊)
放生津
魚津
高松
高岡
卯辰山
戸出
富山
大野
倶利伽羅峠
宮腰(金石)
八尾
福野
越中
松任
尾山(金沢)
井波
鶴来
福光
小松
五箇山
庄
城端
加賀
大聖寺(加賀)
山中
川
飛騨
福井
越前
今庄
木ノ芽峠
敦賀
美濃
日本海
佐渡
能登
加賀
越前
越中
若狭
飛騨
美濃
京都
近江
大坂
太平洋

かつおきんや

あらしの中の十七年——長屋八内のご一新

第一章

その一　高岡の打ちこわし

安政五（一八五八）年の夏は、幕府がアメリカと通商条約をむすぶことをきめたため、日本じゅうが大きくゆれたが、加賀藩では、領民たちがおこしたつむじ風がふきまくって、藩全体がはげしくゆすぶられた。

そのはじまりは、七月十一日の夜、城下町金沢、卯辰山での声合わせからだった。ま夜中に千人をこえる人びとが頂上にのぼって、すぐ目のまえに見えるお城めがけて、「米くれやあーっ」と、藩主相手に声をそろえてさけんだのである。このさけびはたちまち加賀・能登・越中三州（加賀・能登は石川県、越中は富山県）にひろがって、まずしい人びとの胸にくすぶっていたほのおをかきたてることとなった。

鋳物で知られる越中の町、高岡でさわぎがおきたのは、七月十六日の夜だった。町奉行岡田雄次郎・長屋八内、ふたりとも高岡にいないあいだのできごとだった。

〈安政五年夏〉

あつかった一日がようやくくれて、川岸にならぶシダレヤナギのほそい葉が見わけにくくなりだしたころ、高岡を東西にながれる千保川の西のはずれの川原に、おそい夕すずみでもたのしむかのように二十人ばかりの男たちがあつまってきた。それと同時に、近くのせまい小路のあちこちで、

「はじまりやぞ、ちゃっとこいや。」

「地蔵川原や、そろうていこうぞ。」

と、ひくい声が合いことばのようにとなえられた。そして、この合図をまっていたように、うすよごれた手ぬぐいでほおかむりした男たちが、そこらの家いえからひとりふたりととびだしてきて、さっきの川原へすいよせられていった。

一番新町に住むわかい鍛冶職人間右衛門の家からそこまでは、つい目と鼻のさきだった。このひくい声がささやかれだしたとき、間右衛門は、ちょうど便所でしゃがんでいた。その声をきいたとたん、間右衛門は、からだじゅうがぞくっとなって、思わずくしゃみをしてしまった。

「そうか。いよいよ、やるのか。」

先日から米の値が毎日のようにあがり、人びとのあいだでは、これではかなわぬという気持ちがたかまってきていた。そこへとびこんできたのが、尾山（金沢）での声合わせの知らせだ。

――おらっちゃもやってやろまいか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――殿さまはおらねど、旦那衆が相手や。
――わるもうけをする米屋やら、いばりくさっとる旦那衆に、まとめておきゅうをすえてやるまいか。

こんな話が、この二、三日、そこらじゅうでささやかれていた。それが今夜はじまるのだ。

大いそぎで便所からとびだした間右衛門は、そうっと流し場にいき、へっついにかかっているかまのしりをなでた。両手にべったりと黒いすすがつく。その手で顔をペタペタとなでた。そしてにやっとわらってほおかむりをし、足音をしのばせて家を出た。年とった親たちや、兄夫婦は、よこになったところらしく、しんとしていた。

月は出ているはずだが、うすい雲が空をおおってぼんやりしている。間右衛門が西にむかっていそいでいくと、二番新町から五、六人かたまって出てきた。声はかけなくとも、おなじかっこうを見れば、仲間にちがいない。白い歯を見せあってにこっとわらうと、さきへいそいだ。そこらじゅうの小路からつぎつぎと仲間がやってくる。

上河原町までくると、道いっぱいにおおぜいがかたまって、もうやりだしていた。

「塩屋吉右衛門。おるかーっ。米のあんばいがなっとらんぞーっ。」

「なっとらんぞーっ。」

「ほどこし米を、ちゃっとだせーっ。」

「ちゃっとだせーっ。」

ひとりがさけぶと、みんながあとをつけていちどにどなり、ドンドンドンと大戸がたたかれ、バラバラバラッと石がとぶ。塩屋吉右衛門は町の用米係のひとりだ。

三、四回さけぶと、二けんおいたとなりの開発屋と佐野屋のまえで戸がゆすぶられる。

「開発屋ーっ。おらっちゃを見ごろしにする気かーっ。」

「見ごろしにする気かーっ。」

「佐野屋ーっ。出てきて、つらを見せーっ。」

「つらを見せーっ。」

どなっているうちに、だれかがいった。

「役人どもがきたぞ。道ふさげっ。」

御用と書いたちょうちんをふりかざして、足軽小者が二十人ばかり、たすきはちまきすがたでかけてくる。そのまえに、ゴロゴロゴロと音をたてて大八車が七、八台ひきだされ、ぴしゃりと道はふさがってしまった。

「夜中になにをさわいどる。さっさと立ちさらんと、いたい目にあうぞ。」

小頭らしい足軽が六尺棒をふりまわしてさけんだが、たちまち、

「おまえらこそなにしにきた。けがせんうちに、かえれ、かえれ。」

と、どなりかえされた。つぎにはその小頭のわきに老人が出てきて、おちついた声で話しかけた。

「わしは越前屋じゃ。わるいようにはせんさかい、ひきあげてもらえんじゃろうか。」

町年寄のなかでもいちばん年上で、高岡一の家柄の人だ。さすがにみんなしんとなった。
「わしらはいまも町役衆の寄り合いをひらいて、米の値さげと、二月のようにこまっとる衆に銭をくばることを、きめてきたとこながじゃ。あすの朝、すぐにとりかかることになっとるし、たのむ、ひきあげてくれ。」
と、越前屋は大八車に両手をかけて、白い頭をふかぶかとさげた。だが、すぐ人びとのあいだからだれかがさけんだ。
「あやしいもんや。そこらじゅうの赤ん坊が腹へって、泣き声も出んようになったこと知っとるかいや。ここまでほうっといたがは、どこのどいつや。」
「おいや。うそでないがなら、いまここへ、米だわらをはこんできたらどうやい。」
「けがせんうちに、かえれ、かえれ。」
この声におこった役人たちが荷車を力ずくでひいていこうとする。
「やる気かーっ。木っ葉役人ども。」
ワッとばかり、いっせいに大八車をならべておしだし、そのうしろから小石がとぶ。車をはさんでおしあいがしばらくつづく。
このあいだにもほおかむりの衆はふえるいっぽうで、そのなかの二百人ほどが西へむかった。橋番の鴨島屋に石を投げこみ、木戸をこわして橋をわたり、そのさきの横田町で二、三げん、家のなかまではいりこんだりして、やがてひきかえしてきた。

もうほおかむりの衆は六百人をこした。

「いくぞーっ。」

大八車を力ずくでおしすすめる。役人たちもぐずぐずしてはいられないと見たらしく、いそいで役所へひきあげていった。これでじゃま者はいない。

「それいけっ。ワーッ。ワーッ。」

と、ときの声をあげて、大店のならぶ通町、守山町、木舟町、小馬出町へとおしだしていった。まっ黒な、いかりにもえるつむじ風だった。

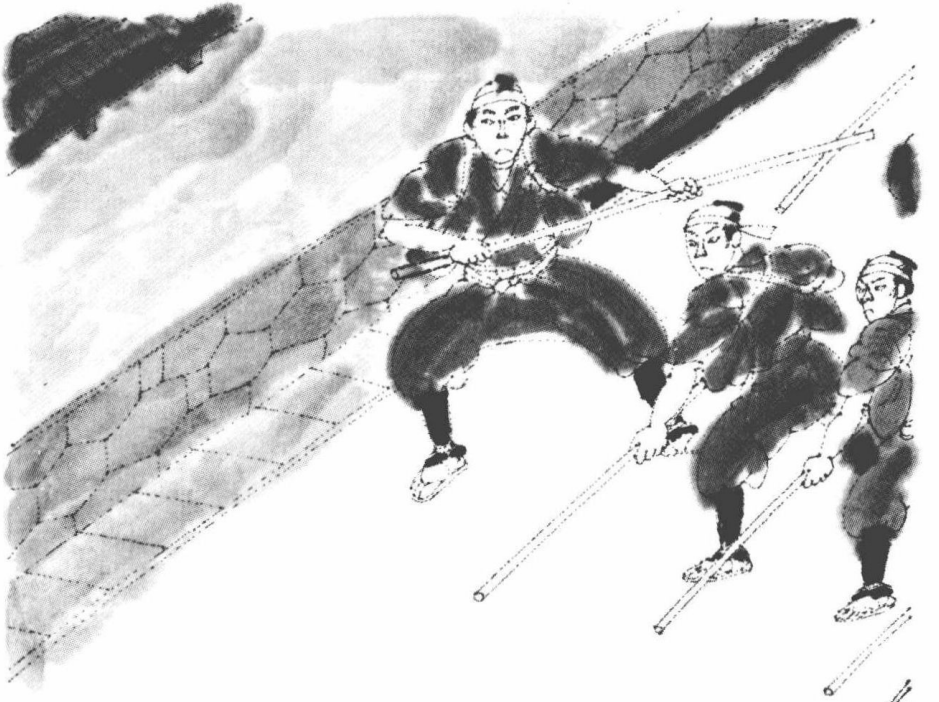
通町の米屋藤右衛門、小馬出町の関屋忠右衛門の家では、家財道具がもちだされ、米だわらはやぶられ、柱には切れ目がいれられて、さんざんに打ちこわされた。

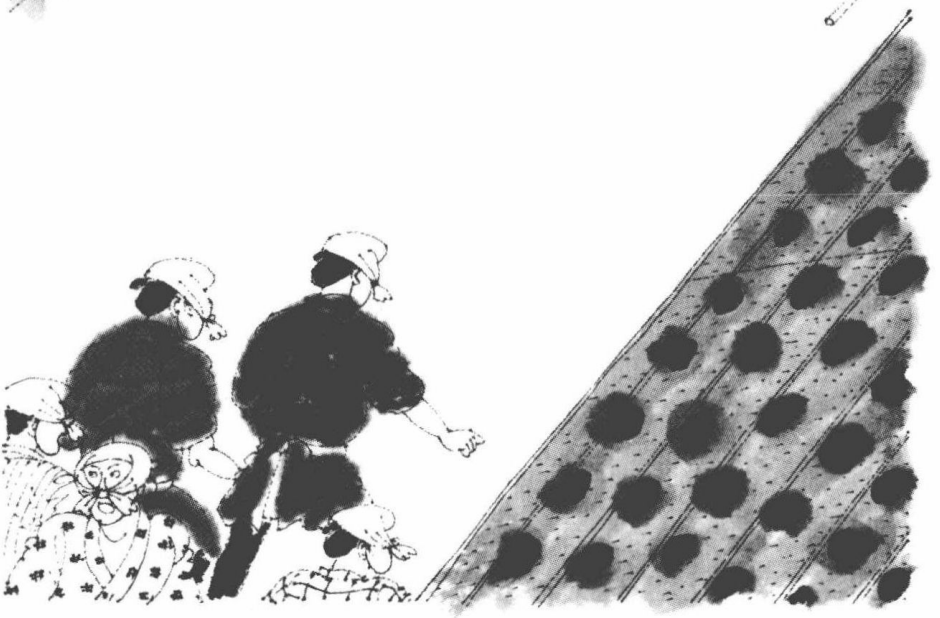
それから人びとはいくつかにわかれてあらしまわった。ずっと東へすすんだ衆は木町までいって町年寄、鷲塚屋八左衛門の家などを打ちこわしたし、城跡に近い坂下町や家塚町では、のきなみにひさしやしとみ戸などがこわされた。

東の空がうっすらと白みかかったころ、間右衛門は坂下町であくびをこらえかねていた。守山町でたきだしがあって、白いにぎりめしを四つもくったのに、腹がへってグーグー鳴りだしたし、坂下町であおったひや酒のせいか、きゅうにねむくなってきていた。

そろそろ家へかえりたくなったなあと思ったとき、ほおかむりの流れは西へもどりはじめた。間右衛門は、おしながされるように、一番町、二番町とすすんでいったが、とちゅうで一けんの

家がこわされていた。ここも米屋だ。
間右衛門は、ふっと、なかへはいってみた。米がまきちらされ、ふすまや戸は大きく切りさかれ、かべにもあながあけられて、押入れのなかにはどろ水がかけられている。土間のおくにある土蔵は、とびらがぴたりとしまっている。そのまえまでいったとき、外で、
「さっさとひきあげやーっ。おくれたらあぶないぞーっ。」
と声がした。間右衛門は、土蔵のまえの土間にまきちらされている大豆を右手と左手、それぞれにつかみ、入り口のほうにむかった。
店のまえへ出ると、人びとのかたまりはずっとさきのほうをまがっていく。
「おらがしんがりか。くたびれたなあ。」
とつぶやきながら、間右衛門は、みなからはなれてのろのろといく十人ほどのあとを、もっとおもい足どりで歩きだした。
コケコッコー。
空がかなり明るくなってきている。腹のそこからねむけがのぼってきて、大きくあくびをしたが、あけた口が、そのままとまった。目のまえをいく十人ほどのまえへ、ものかげからバラバラッととびだしてきた者たちがいる。
白いはちまきに白いたすき、みな六尺棒をかまえている。役人たちだ。十人ほどのほおかむりの衆の足がとまった。仲間たちは、町かどをまがってしまっていて、自分たちだけが切りはなさ





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com